幸福のエトワール

小坂戒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幸福のエトワール

【Ｎコード】
Ｎ２１１３Ｅ

【作者名】
小坂戒

【あらすじ】
あれとか言われているのはバレエの主役だったりします。非常に分かりづらいのはどうぞご勘弁を。

第壱話

後世にオペラ座と呼ばれることになる、バレエ館の客席の横側に広がる特別席。
その中でも一番舞台が映えるという区画を二人の貴族が占めている。
一人は中肉中背、舞台に目を向けてはいるがそれは他に見るものがないからであろう。
もう一人は痩せ型で、前者と違って熱心に舞台を見つめている。

まるで、欲しくて仕方のないものを手に入れた子供の様に屈託のないといった風に見える笑みを浮かべながら、片方の佳人が問う。
「どうだ、あれは」
片方の青年貴族は一欠けらの興味がないような目と口調で答える。
「とてもお美しいですね、ご婦人としても遜色はないでしょう」
そのような返答であっても満足であったようでその佳人は真っ赤な唇を引き上げる。
「舞台の上だというだけで、あのようになる。愚民どもに見せるためではないと言うのにな」
青年が蔑んだ様な、それでも初めて興味を見出した口振りになる。
「庶民であれ出すものは出しているのですよ。・・・しかし意外です。変わった焦らされ方が好きなのですね。」
「物事、一方ばかりと言うのは退屈だ。時には緩やかではあるが変化は必要であろう」
「あの娘はむしろ、変化の方がお望みのようですが」
清純とも言えるかんばせを持ちながら、そこだけが妖艶だと言える唇がねっとりと動く。
「ああ、純粋に楽しんでいるのだろう。楽しめば良い、その後の啼き声が更に良くなる」
青年は今更気づいたように舞台の方に目をやる。

「勿体無い事をしました。演目はもう終わりのようです」
「貴様が見ていなかっただけだ。私は目を離したりはしていない」
先ほどの興味は失せたように、青年は素早く席を立つ。
それを制して佳人が、耳元で囁く。
「少し待て、話がある。先ほど貴様が言った事を考えて貰おう」
目だけをそちらに向ける。
「何でしょうか、私の出来ることでしたら。それと、貴方には興味がありません」
「なに、簡単な事だろう貴様にかかれば。それと、私も貴様には興味はない」
口調は冷たく、顔は誘うようであった。

バレエ館の特別席の1つ。ここは貴方との為に、と饐えた臭いのするご婦人が取ってくれた席らしい。
誘っていただいたのであるから、遠慮はしていたが思わず眠りそうになったことも何度かあった。
それだけ此処は退屈であった。
オペラはただ高いだけで何を言っているのか分からない。
踊りはゆっくりとし過ぎて目が疲れる。
庶民の芸術とは耐えるものかと思わず勘違いしそうになったものだ。
始めは気づけなかったが、この演目の主役の踊り子はとても魅力的であった。
何も楽しくはなかったがあの踊り子だけは素晴らしい。
私は不意にあれが欲しいと思った。
綺麗なだけじゃない、どことなくいやらしい。
そう、あれが常に私の物だと言う事は確実であらねばならないとまで思った。
「ねぇ、どうでした。とやかく言う人も多いようですけどバレエも悪いものではないでしょう」

夢を覚めさせられたようで思わず不機嫌な目つきをしてしまった。
そもそも私はこのご婦人の声が好きにはなれない。
友人連中には人気が有るようなのだが・・・
「ええ、エリザ様。あのような物がいると教えてくださった事にとても感謝いたします」
それ以外は綺麗だと思う。それでも、あれを見せられたのだからどうも思いようがない。
「・・・そう、楽しんでいただけたなら何よりです」
ご婦人の不満そうな溜息を無視しつつ早々と辞去する。
急いで、馬車へ乗り込む。
心よりご婦人には感謝している。しかし、それまで。
後は私自身が手に入れなければ、あれを。

第弐話

ただひたすらに欲しいと思うのも館へ向かううちに冷めていき、どのようにして手に入れたものか、それを考えざるを得なくなった。そういえば友人連中が下卑た事を言っていた。
踊り子と言うものは演目が終われば控え部屋で金を沢山携えた男を待って身体を解しているのだと。
なるほど、金持ちほど激しいとでも言うのだろうか。
私にはあまり変わった性癖はないと思うが、金はある。
しかし、私が他の物好き共のように控え部屋へと行けと・・・。
それは気に喰わない、どうして踊り子などの為に私が恥をかかねばならん。
・・・そうか、汚れた物を手に入れるには私も多少は汚れねばならんか。
いや、もう少し落ち着いてから、あのバレエ館の館長を訪ねるとしよう。

佳人と踊り子との嬌声を飽きるほど聞かされてから、青年貴族と佳人は馬車を連ねて後者の家へと向かった。
馬車のワゴンの中で、青年は眠り。
佳人は、窓越しに無感動な目でそれを眺めていた

佳人の館の中、青年貴族が遠慮儀気味に今の椅子に着く。
洋酒を棚より選別しながら佳人が振り返る。
「酒は何でも良いだろう。いつも貴様は飲もうとはせんがな」
少し迷惑そうに青年が応える。
「飲むのはいつも貴方だけです。私は介抱のために用意されている

のでしょう」
「私は貴様だけにしか介抱されたくないのでな」
見る人が見ればゾクリとするような笑みを浮かべる。
「そんなことより、意外でした。あの娘をこの広すぎる館の家具にするのかと思っていました」
「あれは踊りたいと言ったのでな。あくまで抱かれる時も踊り子として抱かれたいそうだ」
青年は鼻を僅かに鳴らす
「かつて、貴方が飼っていた物の髪が美しいといって切り落とさせた事は忘れられましたか」
悲しむでもなく無表情で佳人は呟く。
「忘れたりはせんよ、反省もしなかったが。それでも、命を絶たれたりなどされるのは宜しくない。家具も犬も捨てるのは主人からであるべきなのにな」
「珍しい、悲しんでおられるのですか」
無表情から冷たい目となる。
「黙れ」
その後、佳人は黙々とグラスを傾け、青年は欠伸を漏らしながらもボトルを除けて佳人の酔いつぶれるのを阻止したりなどした。
先ほどの会話以降、ずっと無口であったがおもむろに口を開く
「では、私は休ませてもらうとするよ。部屋を用意させている。寝顔を見つめる趣味がなければそちらに引き上げるといい」
「喜んで、引き上げさせていただきます。1つだけ答えていただいた後にですが」
怪訝そうに眉を寄せる。
「何だ」
「貴方があれほどに望まれた髪は今でも保管されていますか
「腐ってしまったので捨てた」
あくまでも無表情であった。
「そうですか。では、良い悪夢でも見てください」

この青年には珍しく笑みを浮かべながらそそくさと辞去した。
本当は笑い出したかったのかもしれない。

第参話

「誰です」
性急なノックにやや不機嫌な調子でここバレエ館の館長は声を返す
「平民連れが私にそのような口の利き方など、規律の乱れの表れだな」
全くどうして平民は己の身分を自覚をしないのであろうか。
「お偉い方がこのような所へ来る事などなかったものでね。失礼をしました」
「物分りが良いな、その賢い頭で判断をしてもらいたい。欲しい踊り子がいる」
館長は怪訝そうな顔立ちをする
「誰の手もついていない踊り子でしたら勝手に楽屋へ行って無理矢理に手篭めにすればいいでしょう」
分かっていない、あれに誰も手をつけないはずがあるまい
「昨日の夕の演目で主役であったあれだ、あのような素晴らしい物には誰が手をつけているのだ」
すると、館長は首肯して面白げに答える。
「ええ、あれはもうとあるお偉方の物となっています。もう買うこともなりません」
やはりか、それでも引き下がるわけにはいけない。
あれは私の物でないといけない。
「その方よりも私に所有された方が幸せだと思うのだ。あれもお前も」
館長は不服そうに鼻を鳴らす
「残念ですね、あれはあの方に買われた事を心から喜んでいます」
「私に買われたとすれば、ほとんどの自由も食事も衣服も用意する。勿論、お前にもそれ相応の物を渡してやる」
もはや呆れ果てた様に館長が告げる。

「あれの持ち主は私です。なので、この場はお下がりになって私を呆れさせないほうが宜しいですよ」
私を馬鹿にしているのか、このクズは。
しかし、こいつはあれの持ち主であるのは本当のこと・・・だとすれば、ここは従うしかないか。
全くもって屈辱でしかない。
「そうか、では今だけだ。今だけは引き下がる。また、次は良い返事を貰う」
腹立たしい、このままあれの控え部屋へ押しかけるのも考えたがそれはあまりにも下品だ。
また次にはあれに直接話をつけるしかないか・・・

「誰ですか」
この時間は誰も来ない筈なのですが、どなたでしょう。
「失礼します、ハワード卿の代理で来ました。貴方がイリス嬢ですか？」
はて、見たことのない人ですね。信用していいものでしょうか、それに・・・。
「あの方は私の名前などとうにお忘れだと思っていました。代理の方ならそれくらいご存知でしょう」
どうして、代理人だと言う方は方頬をゆがめておられるのでしょう・・・面白い事など何もなかったはずなのに。
「いや、これは失礼。貴方の口調があの方と少しだけ似ているように感じましてね。」
この人は何を言いたいのでしょう、あの方と似ているなどと。
「それで、用件は何でしょうか。本番前の主役の舞台を覗く等と言った無作法はあの方はなさいませんでしたよ」
何か気に喰わないことでもあったのか、すぐに無表情になる。

忙しい方ですね。
「そうですね、ハワード卿よりメッセージです。こちらへ置いておきます。では、失礼。」
辞去の返事も待たずにさっさと行ってしまわれました。
それにどうして広くもないこの部屋だというのに卓の上になど置かれるのでしょう。
しかし、あの方が来ない。
これで今日の舞台は途中で顔を赤らめたりも足の開きを戸惑ったりもしなくなるでしょう。
あの方が寄越したペーパーナイフで開けた綺麗な封にはとてもシンプルな紙が一枚。
『今夜は私は行けない。充分に舞台を楽しめ』
そのようなことを書きながら微かに香水をふっているのはあの方の未練でしょうか。
夜のあの人は、とても強引で好きにはなれませんけども一度舞台に来て下されば良いのに・・・。

とても、気丈であった。
貴方はそこに惹かれたのでしょうか。それともそうなるようにしたのでしょうかな。
それなのに夢を見続けることは許しませんか。
残酷な事です。
しかし、とっても楽しそうではありますね。

第四話

舞台では演目が行われている時間、不躾にもノックの音が響く
「誰です」
不機嫌そうな館長の声。
「ご亭主、私です」
口だけは笑みの形をした青年がドアから顔を覗かせる。
それを見るややや柔和な表情となる。
「ああ、貴方ですか。何か御用でしょうか」
「近いうちに計画している公演の為にこちらの舞台を貸してもらいいたいのです」
少々驚きがかくせないようである。
「それは払うものを払ってくだされば結構ですが、此処までいらっしゃるということは・・・」
「ご推察の通り、実を言えば三日後です。よって今、返事をしていただきたい」
館長は多少気を悪くしたようで、それでいて愉快そうでもある。
「貴方がそのような無理を仰るのですから、あの方のご希望と言う事ですか」
青年は首肯する。
「それと、三日後にでも間に合うような役者も手配していただきたい」
「あの方からしっかり引き出してきて頂けるなら喜んで」
「勿論です」
両人、あくまで無表情であった。

「あの、これは貴方がお書きなさったのですか」

楽屋の一室、今はイリス専用となっている此処に青年とイリスが二人でいる。
「ええ、これが本業ですから。たまには書いてあの方に差し出さないといけないんです」
「それにしても、三日後とは性急過ぎませんか。このように凝った物ならもっと時間をかけるべきでしょう」
その通りだと言わんばかりに青年は首肯する。
「そうして欲しいとは言ったのです。それでもあの方の我儘がどの様な物かご存知でしょう」
「舞台が三日後なのも、内容も何も文句はありません。でも、気になることが１つだけ」
青年は首を傾げる。
「あの方が舞台で皆と同じ様に稽古をされるんですか。なんだか可笑しく思えてしまって。」
「ええ、脚本と同じで演出も私ですから。舞台も上がった以上は従っていただきます」
「そうですか、楽しみです」
イリスは心底そう思っているように笑った。
眩しいとさえ思ったのか青年は目を細める。
「しかしですね、一箇所だけ私の権限の及ばないところがあります」
「ええ、私があの方を殺す所ですね」
少し楽しそうな口ぶりであった。

第伍話

「愚民ごときが私の前でわめくな。返事は最小限で済ませろ」
民衆は顔を見合わせる。
先ほど、この佳人よりこの街一番の美しい者を差し出せと言われたばかりである。
それから1分とて経ってはいない。
「貴様らが一番美しい者を持ってくれば良いだけだ」
街の代表らしき者が一歩前に出る。
「そうおっしゃられましても、誰が綺麗かなどと決めたこともありませんし。差し出すと言いましても人、一人のことですので・・・」
不快そうに片眉を上げる。
「平民に許される権利は実質、私たちに従うか、そうでないかだ。従わない者は人ですらない」
呆れて声も出ないように民衆はじっと見つめるだけ。
「私の指示に従わないことは責めない。ただ、今後の一切の保障は何も行われない。」
数人が息を呑む。
凶作であった時に米の買い付けが不利になる。
疫病が起こったときにまともな処置を受けにくくなる。
最悪の場合、誰かが殺されたとしても見向きもしなくなる。
・・・かもしれない。
それも全て此処にいる人の気分次第。

断ることは出来ない、と代表数人の意思は決まった。
あとは誰を差し出すかである。
何にせよ誰かを選ばねばならない、その事に代表連中が頭を重くしようとしていた時、華奢と言ってもいい体躯をした少女が佳人の元へと歩み寄った。

佳人は声も出さずに睨む。
すこし押されながらも少女は口を開く。
「ねぇ、私はあんたの事が大嫌い」
青ざめる代表連中、反対にニタリと笑う。
「こんな生意気な小娘を啼かせて自分の物にして用無しだと捨ててみたくはない」
「むしろ、今此処で私のもにすることも考えている。」
左右に一言囁いてから踵をかえす。
「帰るぞ、あれを連れて行く」
側で控えていた男に連れて行かれる際に少女は振り返って街の者達に怪しい笑みを浮かべる。
「あんた達とも離れられてとても良かった。私はこの街が大嫌い、ずっとね。」
緊張を解いて座り込んでいた何人かはその言葉で頭や胸を押さえていた。

数日後、その一帯を騒がせた報せが即ち
領主死亡であった。
その街の人はあの少女の消息を知りたがったがそれを知っているものが通りかかることはなかった。
ただ、これで街の危機は去り
人々は楽しく暮らせるのであった。

第陸話

「まだ、教えては下さらないのですね。あの方の最期を」
「それだけは守らないと私の立場がなくなります」
青年は苦笑いをしたようであった。
「ところで、私はどうなるのですか」
「考えていません。おそらくしぶとく何処かで生きていることでしょう」
「きっと、そうでしょうね。そんな子ですから」
舞台の観客席の前の方、青年貴族と少女は今宵の演目の設営を見ている。
「あの方は今、どこにおられますか」
「こう言っては何ですが、身を清められているのでしょう」
そう、と少女は呟き前を見つめる。

開幕時間は夕闇が落ちる頃とは何とも気取った言い方だ。
余りの忌々しさに妙案が浮かぶまではバレエ館には近づく気は無かった。
だが、喧伝によると主役はあれだとなっている。
もう一人主演がいるようであるが、それがどうもこれではハッキリしない。
あれを手に入れるのはあくまで私である。
しかし、今はただあれを見に行きたい。
夕陽が建物の屋根を照らす頃に私は馬車をバレエ館へと走らせた。

しかし、何と言う混雑か。
あれはこれ程の人をかどわかしたという事か。

流石だ、それでこそ奪う甲斐がある。
しかし、恥を忍んで特別席を確保させていて良かった。
さて、今度はどのようにあれは私に劣情を抱かせてくれるのであろうか。

初めての演劇だからか、ほとんどの人が緊張しています。
私があの方を殺せるというとても嬉しい役の為でしょうか、緊張よりも興奮しています。
あの方は私の持ち主です、それでも私は私だとしか考えられません。
私の夢の最期をあの方は私に飾らせてくれるようです。
なんて、薄情なことでしょう。
でも、私の愛し方としては決して間違っていませんけど。

本当に嬉しい。
最期を私で塗れさせる事ができるなんて。

第七話

「お前は私のことが嫌い、しかし私はお前のことが嫌いではない」
あの方は困ったように笑われたようです。
こんな時だけ私のことを人として扱ってくださるのですね。
「気色悪い」
心底そう思っているかのように吐き捨てないといけません。
「間も無く私に抱かれるというのにな」
「嫌。それにあんたは女でしょ」
「今、お前を抱くのに関係がない」
あの方がいきなり私の方を抱いて唇を重ねてきました。
驚いた私は目を開いたまま息をするのも苦しくなっていました。

私が驚いている間にあの方は私の唇を割ってご自身の舌を指しいてれてきたのです。
もう驚くのにも慣れてしまったのでしょうか、気づけば私はあの方に応じていました。

「なんだ、あれは」
一人しかいない特別席の中、思わず吐き捨ててしまう。
先程まではただの傲慢な貴族が民衆に我儘をおしつけるという内容であった。
それでも、貴族なら許されること。
何も求められないままに守られていると信じていた民衆こそ愚かしい。
言うなればこれはその報いの現れか、私はその程度だと考えていた。

こんなことを知らされていたならわざわざ来る事もなかった。
あれ自身に劣情を駆り立てられるのはそれで一つの快感だ。
だが、どうしてあれと誰か分からぬ者との絡み合いを眺めなければいけない。

このまま帰るか、いや・・・あれをまだ眺めていたい。
陶酔しているあれもとてもいやらしいものだったではないか。
私が自己完結を迎えたとき、誰かが息を呑む音がした。
あまりにハッキリと聞こえてしまったので舞台の上でのことかと思い、私は急いで舞台に目を注いだ。

とても気持ちのいい事をしているはずなのですが、私はどうも不安で仕方がありません。
今まで、あの方はご自分の欲望を満たそうとなさるだけで私の唇を奪うことすらなさいませんでした。
それだというのに台本にすらなかった事をされるというのは・・・
脚本家の方が言っていたあの方の死の間際の演出ということなのでしょう。

私が考えに没頭しているとあの方が私の耳に唇を寄せてきました。
「次に私が下を入れたら思い切り噛み切れ」
言っている事も意味もよく理解してませんでした・・・
それなのに私は肯いていました。

いきなりの口づけ、そしてすぐに舌が入ってきました。
肯いたものの私はもう少しあと少しとこの快楽にしがみ付いていたくて
あの方の命令に背いていました。

伏せていた目を少し上げるとあの方が私を見つめていました、とても怖い目で。
その時、私は思いました。
『私をちゃんと認めてくれている』
恍惚感さえ覚えました。
私の存在意義は求められる事だけ、それ以上など望みようはありませんでした。

やっと終わりますか、貴方も。
私自身が終わらせられなかったことが少しだけ残念でもありますが。
あの子は夢を失っても生きていけるでしょう。

しかし苦しそうですね、でも呼吸困難と出血多量ですぐ死ねることでしょうから心配は要りません。
邪魔をされないようにギャラリーも揃えたのですから。
結局貴方の思い通りに動かされました。
しかし、結構です。
とても貴女は幸せになれたでしょうから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2113e/

幸福のエトワール

2010年10月14日15時37分発行